

花は孔明から預かった書簡を玄徳へと届け、次に雲長から孔明への書簡を預かり、孔明の執務室へと戻る。

執務室の扉を開けようとして、ちょうど出てきた孔明とぶつかりそうになった。

「わ、すみません！」

「ああ、花。ちょうどよかった」

頭を下げる花に、大丈夫と手を振りながら孔明は室内を指差した。

「急な来客でちょっと出てくるから、悪いんだけど、その間にあの書簡を片づけておいてくれるかな」

花は孔明の指差した彼の机の上を見て、次に孔明をじっと見た。

「師匠……」

孔明の机の上は書簡で埋もれてしまっている。もはや書き物をするスペースすらない。花の呆れ気味の視線に気づいた孔明は、視線を反らせた。

「ボクのせいじゃないよ。ついさつき尚書台の役人が持つてきて、積み上げていったんだ。ひどいよねえ。あれ、目を通して、緊急性の高いものから順に並べておいてもらえないかな」

「はい」
うなずきつつ考える。ということ、孔明が外出している間に片づけないといけない。花はもう一度孔明の机の上

を見た。まだこちらの文字の読み書きに慣れない花には、整理を含めてギリギリ終わらせることができるかどうかの量だ。これはがんばらないといけない。

「よろしくね」

孔明の声に、花は再度うなずき、そして笑顔を浮かべた。「いってらっしゃい。打ち合わせ、頑張ってください」

「うん、ありがとう」

孔明も笑顔になり、手を振って別れた。

執務室に入って、花は扉にもたれかかり、熱くなった頬を手で押さえた。

今のやりとり、ちょっと奥さんみただった……？　こなちよつとしたやり取りでも、孔明のそばにいられてしあわせだなあと感じる。

けれど山積みみの書簡が視界に入った。花は我に返ると、頭を横に振った。ただでさえ時間が足りないのに、こんなことを考えていたら絶対に間に合わない。せっかく孔明のそばで頑張ろうと決めたのに、仕事が出来なさすぎて呆れられてしまうのはイヤだ。

花は頭を切り替えて、器用に積み上げられた書簡に取り掛かることにした。

孔明と想いが通じ合って半年ほど。

忙しい孔明とは、なかなか一緒にいられない。孔明は会

議に出ている事も多いし、花がその場にいることはあっても席は遠い。執務室にもついている日であっても、仕事中に甘い気持ちの入る余地はない。黙々とそれぞれの仕事に没頭しているだけだ。会話と言えば、花が仕事の内容や読み書きの文字について質問をするときぐらい。

そのことに不満はない。それだけじゃないから。

休憩中二人でのんびりとお茶をしているときに、以前とは違った甘さを含んだ孔明の視線にドキドキさせられることがある。

仕事で夜遅くなってしまったときには、孔明が花の部屋まで送ってくれることもある。そんな時は手を繋いでくれる。

そして孔明の別宅で、十年間ずっと書き続けてくれた孔明からの手紙を読みながら二人で過ごすこともある。そして抱きしめられてキスをすることだってある。

恋人だと言ってくれたこともあるし、孔明が花のことを大切にしてくれていることは分かっているつもりだ。

花としても大好きな人のそばにいられてしあわせだ。

それなのに――。

「欲張りなのかなあ」

芙蓉姫とお茶をしながら、花はついため息をついてし

まった。

「そんなわけないでしょ。あなたは謙虚すぎよ、花」

「うーん」

お茶の水面には、眉尻の下がったはつきりしない自分の表情が映っていた。

孔明のことが好きで、孔明も自分のことを大切にしてくれていることが分かっている、それでもまだ物足りないと思ってしまう。

「好きな人に好きだと言ってもらいたいって気持ちも、好きな人を独占したいと思う気持ちも、当然だと思おうわ」

芙蓉の言葉に、花は曖昧にうなずいた。

孔明が花のことを好きだと言ってくれたのは、孔明が花を返そうとしたあの後だけだ。

「相手のことが好きだからこそ、相手の気持ちも確かめたいし、独り占めしたくなるんでしょう。特に孔明殿は人に気持ちを悟らせないから」

「あ、でも……」

花の頬が赤く染まった。

初めて孔明からの手紙に返事を書いた時には「離さない」と言ってくれた。想いが通じたあの時ですら「冗談と思ってくれていい」と言っていたのに、ようやく本心を見せてくれた気がした。

好きだと直接的な言葉はあの時以来言ってはくれないけ